

五木寛之◎福永光司

Itsuki Hiroyuki

Fukunaga Mitsuji

こんとん

混沌

からの出発

道教に学ぶ人間学



中公文庫

こんとん しゅつぱつ
混沌からの出発

定価はカバーに表示してあります。

1999年3月3日印刷

1999年3月18日発行

著者 いつ き ひろ ゆき 五木寛之 / ふく なが みつ じ 福永光司

発行者 中村 仁

発行所 中央公論新社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1999 CHUOKORON-SHINSHA, INC.
Hiroyuki Itsuki / Mitsuji Fukunaga

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203368-3 C1195

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

混沌からの出発

五木寛之

福永光司

目次

まえがき 熱い知恵に学ぶ——五木 13

第一章 漂流する現代日本人の心 19

時代の底を漂う気配——五木 21

「あてどなさ」の手掛かりを求めて 21

いまや宗教、哲学、科学は無力か 23

カルト宗教を生み出す現代人の心の構造 26

日本文化の縁辺部に追いやられた真理 30

希薄な現実感を揺さぶるもの——福永 34

中国哲学の縁辺部としての道教 34

コンピュータのリアリティと現実の狭間 36

コンピュータ・エキスパートの悩み 39

生身の女性に対する恐怖感 42

現実感を喪失した現代人の病根 45

現代が胚胎する危機の兆候——五木 49

過熟する子どもたち 49

若者だけではない年齢の退行現象 52

自殺者が交通事故死者の二倍という現実 55

第二章 アジアの混沌を象徴する道教思想 59

道教、もつともアジア的なもの——福永 61

宗教でもなく哲学でもなく思想でもなく 61

アジア文化の特徴はミックスとコンビネーション 64

各地に拡散して残る道教文化 67

多元性の原理と一元性の原理——五木 72

水清ければ魚棲まず 72

二つの原理の交代とともに進化した文明 74

スリリングで刺激的な思想の時代が始まる 78

忘れ去られたものに次代の萌芽がある 80

アジア的風土としての道教思想——福永 82

宗教でもあり哲学でもあり思想でもある道教 82

耶馬台国は道教国家だった？ 84

鬼道から聖道へ。四段階で変貌した道教 86

矛盾を超越する融通無碍のアジア的知恵 88

言葉や風土が思想や宗教を変えていく 91

「道」とはあるがままそのものを認める精神 94

道教が感じさせるアジア的凄味——五木 98

シンガポールの礼拝所で見たもの 98

切り裂かれた日本人の感性 100

「道」のイメージに道教を感じる 102

第三章 日本史の深層に秘められたタブー 107

日本文化の根底をなしている道教文化——福永 109

「馬の文化」と「船の文化」 109

道教の思想信仰で書かれた『古事記』神話 112

「天皇」は星信仰の最高神 115

『古事記』の冒頭に現れる「氣の哲学」 118

日本人の生活にしみ込んでいる「船の文化」 121

さらに日本文化の深層部へ——五木 124

文化の探究を阻む民族的タブー 124

文化の喪失は生き方の崩壊につながる 126

言葉の軽視は文化の軽視 128

古代の日本と道教国家——福永 131

紫色と三種の神器にこめられた道教思想 131

大化の改新と道教と仏教 134

道教の楼観、両槻宮を造った斉明天皇 136

仏教は「理の哲学」、道教は「氣の哲学」 138

道鏡を失脚させた和氣清麻呂の秘密 142

古墳、八咫鏡の八角形が意味するもの 144

道教の神に捧げられた祝詞 147

歴史は連綿と続く人生の積み重ね——五木 150

死者に花を手向けた原人の思い 150

歴史は愛しい人生の積み重ねで作られる 152

いまの自分たちを自分たらしめているもの 154

支配層と一般民衆の隔絶 156

日本人の皮膚感覚にしみ込んでいる道教——福永 159

「なまはげ」は典型的な道教の行事 159

陽気と陰気がクロスする七夕祭 161

日本でぶつかった船の文化と馬の文化 166

着物の襟の合わせ方に現れる南北の文化 169

船の文化の象徴としての「倭人」の名 171

第四章 道、無為自然、絶対無の世界 175

アジアの同質性と異質性——五木 177

序列に対する意識の違い 177

表層の「馬の文化」、深層の「船の文化」 179

同質性への共感と異質性への戸惑い

182

異質なものを否定する現代の日本人

184

一元性の原理と中華思想という病根

187

無為自然を究める道——福永

189

宇宙のすべてを包含する「道」

189

死とは元気に帰ることである

191

理解するものではなく、感じ取るもの

195

「柔よく剛を制す」の無為自然

199

「道教的生き方」のすすめ——五木

204

行為を通して氣に合一する日本人の「道」

204

「雑」のはかりしれないエネルギー

207

現代人を再生させる「雑」は道教にある

209

ままならぬものを受け入れる豊穰な知恵

212

おおらかで伸びやかな生への知恵——福永

214

道教の不老長生の健康法

214

五穀を絶つ「辟穀」に学ぶ 216

セックスはスムーズな気の流れの象徴 218

エクスタシーは和気である 222

儒教の背景に隠れた不老長生の思想 224

第五章 混沌の思想が日本を再生させる 229

日本仏教に見る道教的感性——五木 231

肉食妻帯は破戒であるが…… 231

法然、親鸞、蓮如と肉食妻帯 234

浄土真宗と道教に通底するもの 238

道教的混沌こそ生命力の源泉——福永 241

浄土真宗は道教そのものである 241

浄土真宗に見る船の文化 244

殺生戒、女犯戒を踏み越えさせた道教の土壌

浄土真宗のエネルギーは、なぜ失われたのか

セックスの快楽が生命力を生む 252

250 247

混沌のなかにこそある生命力のよみがえり 254

「玄」の色に日本人再生の萌芽を見る——五木 256

自分のなかにあった意外な色 256

現代人の閉塞感とモノトーン文化 258

道教的な混沌が現代日本人を再生させる 260

あとがき 東洋文化の神髄は混沌にある——福永 263

混沌とは真実在そのもの 263

日本文化の底流としての混沌の哲学 266

いのちの営みの原点への入り口『青春の門』 269

●文庫版のために●

加速の時代から減速の時代へ——五木 275

引き廻されの記——福永 280

莊子の説く「不自由」の「自由」——福永 285

混沌からの出発

まえがき 熱い知恵に学ぶ——五木

古い言葉に「面授」というのがある。人づてに聞いたり、本で読んで知るだけでなく、直接その人と向き合って、肉声で教えを受けることをいう。本当の生きた思想や知恵というものは、やはりそんなふうにして、生身の人間から人間へ伝えられていくものなのかもしれない。

だが、最近は新しい情報メディアやコンピュータの普及によって、あらゆる知識が簡単に手に入るようになってきた。その進歩のスピードは、あたかも文明の歴史を一瞬间に凝縮しつつあるかのようにも見える。しかし、そんなテクノロジーの進歩に驚嘆しながらも、現代人は誰しも心の底に、一種いいようのない、かすかな無意識の不安を覚えているのではあるまいか。

面授という表現は、そんなときに私たちの古い記憶の奥から、水中花のようにふっ

とよみがえってくる言葉だ。畏友とか、兄事するとか、恩師だとかいった懐かしい言葉も自然に思い出されてくる。それは単なる古いものへの郷愁ではない。いやおうなしに非情なデジタルの時代に生きざるをえない私たちの、健康な自衛本能のようなものなのではあるまいか。

私はこれまでの人生において、ずいぶんたくさんの方々から面授をうける機会があった。そのことは得がたい幸運だったと思う。この本のなかで私にいろいろ教えてくださっている福永光司先生も、そんな面授の師の一人である。それも堅苦しい教室のなかではなく、いつも自由な場所での座談のような面授だったことは、実にうれしかぎりであった。

あるときは九州のひなびた温泉の宿で、あるときは東北の八甲田山の山中で、またあるときは東京のホテルの一室で、福永先生は実にエネルギーに語り、かつ旺盛な食欲を発揮されるのである。道を歩いているときであろうが、車中であろうが、いったん話が始まってしまえば、とどまるところを知らないのが福永先生のスタイルだ。一度など、タクシーのなかで講義が始まってしまった、運転手氏を困惑の極におとし忘れてしまったことがあった。

「あのー、お客さん、お話し中に申し訳ありませんが、どちらまで行けばよろしいんでしょうか」

と、恐縮しきった様子でおそろおそろたずねた運転手の口調を思い出すと、いまでも笑いがこみあげてくる。

なんの学問的な素養もない私に、それほどまでの情熱で語りかけてくださった先生の姿を思い返すたびに、私は「無私」という言葉の大きさを、感じないではいられない。

百万語をついやして語ってくださったなかから、いま私の心底に刻まれて残っているのは、たった一つ、「知足」という言葉だけであるといったら、福永先生は嘆かれるだろうか。

私はかねてから、仏教、というより、親鸞の思想に心ひかれ続けてきた人間である。最近、ことにその気持ちが強くなってきた。

そんな私にとって、はじめて接する道教の哲学が、思いのほか親しみやすく、共鳴できるが多かったといえ、意外に思われる方もおられるに違いない。これまで道教といえ、なんとなく土俗的な迷信や、あやしげな加持祈禱の風習などと結び